

陳 述 書

2019 (令和元) 年 10 月 4 日

(住 所)

(氏 名) 花 山 知 宏 (印)

私は茨城県水戸市に居住しており、水戸市内の法律事務所で事務員として稼働しています。3. 11 東日本大震災当時、私は笠間市に居住しており、第三子を出産したばかりでした。当時のことを中心に、原発事故時における母親の心理などを陳述したいと思います。

1 経歴

- (1) 私は、1977年2月茨城県東海村で生まれました。父親は動力炉核燃料事業団（現原子力研究開発機構）に勤務、母親は看護師として働いていました。1980年に勝田市（現ひたちなか市）の社宅に引っ越しし、高校生まで同所で暮らしていました。
- (2) 母親は夜勤があり勤務時間が不安定だったため、父親が私を含めた兄弟の面倒をみることが多くありました。それでも父親の職場で事故などのトラブルがあると帰宅が遅くなることもあり、父は「被ばくをした」と言って帰ることもありました。そのため、原子力・放射能の危険は幼少のころから感じていました。1999年のJCO臨界事故では屋内退避の指示が出て、自宅待機することとなりました。このとき目に見えないものに自分の体が貫かれているような言いようのない不安に苛まれました。原子力の事故が直接自分の身に「避難」という形でふりかかったのはこれが初めてのことでした。

2 3. 11に至るまでの状況

- (1) 私は2002年6月に結婚し、笠間市にある家で義理の祖母・父と同居して暮らすようになりました。2003年1月には長女、2007年9月には二女が誕生しました。2008年4月に甲状腺機能亢進症が判明したため、仕事を休職し、治療に専念することになりました。当時は二女の母乳育児中でしたが、強い薬を飲まなくてはならないため、母乳育児を突然にやめることになってしまいました。甲状腺摘出手術を受けて病気がある程度回復したため、翌2009年の年明けから仕事復帰しました。
- (2) 2010年夏頃になり、第三子の妊娠が判明しました。上記のとおり、甲状腺の病気もあったので不安もありましたが、自分自身が三人兄弟だったことから3人目が欲しいとは考えており、また二女のときに途中で終わってしまった母乳育児にもう一度挑戦できる、今度は自分の思うようにやろうと期待に胸をふくらませて出産の準備をしました。産休に入ってからというもの、毎日図書館に通いつめ、出産後の母親の身体のシステムから食事方法など、メモを取って勉強をしました。「今度は自分の納得のいく母乳育児ができる」と思っていました。

3 3. 11東日本大震災時の状況

- (1) 2011年3月4日、帝王切開の手術を受けるため、午前から笠間市内の産婦人科病院に入院しました。手術は滞りなく行われ、午後2時30分ごろに、3,198gの男の子・長男を出産しました。帝王切開術後の安静のためその夜は母子同室にならなかったものの、病院の計らいで術後のわりと早い段階に母乳をあげることができました。術後の経過もよく、母乳育児も看護師さんにも「余裕ですね」と声をかけられるほどで、家に帰ってからは計画していた自分の育児をしようと意気込んでいました。
- (2) 2011年3月11日の午後、翌日退院を控えていたため、退院の準備をして、明日からは大変だからとゆっくりとしていました。親戚が見舞いに来てくれ、あれこれと話をしていたところ建物が揺れ始めました。いつもと同じ程度の地震だろうと、そこまで気を留めずに話を続けていました。しかし、次第に

強くなる揺れにこれはただ事ではない、と長男の眠るベッドを両手で引き寄せて、揺られないように、物が落ちてこないように覆いかぶさって守りました。病室内の家具は大きく移動してしまい、テーブルの上に置いていた甲状腺ホルモン薬も床に広く散らばってしまいました。揺れが落ち着いたので窓の外を見ると、塀が倒れている様子、入り口のガラス戸が割れた銀行、タイルの落ちた家など様相が一変していました。

- (3) 地震からほどなくして、看護師さんが安全確認のため各病室をまわってこられました。「また大きな余震があるかもしれないので、お母さんは赤ちゃんを抱いて1階のロビーに集まってください」と指示があり、長男を抱いて1階におりました。ロビーに降りてみると、飾ってあった絵画が壁から外れ、額縁のガラスが割れて散らばってしまいました。看護師さんが配布してくれた毛布を肩にかけて、20人ほどのお母さんが並んでロビーのソファに座っていました。何度も何度も余震が襲うので、そのたびにみんなで悲鳴をあげました。毛布を頭にかけて、長男を抱きながら「ここでつぶされて死んでしまうのか」と思いました。携帯電話のワンセグ放送でニュースを見ている方がいて、大きな津波が来ているらしいということも知りました。原発になにか起きるかもしれないとは、ことときには思いは至りませんでした。
- (4) 1時間ほどして、余震がある程度落ち着いたので病室にもどるようにと指示がありました。たまたま病院の隣にある学童クラブに通っていた当時8歳の長女とは、すぐに合流することができました。保育園に行っていた当時4歳の二女は迎えに行くのが遅くなり、夜8時ごろになってようやく合流することができました。その日は病室にみんなで泊まって翌朝家に帰ることにしました。保育園でずっと待っていた二女は病院で支給されたパンを3口ほどかじると、よほど疲れたようでばたんと倒れるように寝てしまいました。
- (5) 地震が起きてからずっと、長男をベッドに寝かせるのが怖く抱いたままでした。夜も眠れず、少しでも情報を得ようと携帯電話でニュースを見るなどしていました。あれだけの大きな地震、東海村もどうなっているかわからな

いけれど情報がありませんでした。何時ごろだったか「福島原発が大変」「メルトダウン」という情報が出てきました。前述したようにJCO臨界事故の経験や父親の被ばくなどもありましたので、一晩中恐怖で身体の震えが止まりませんでした。福島が大変なら東海も同じかもしれない、もしかすると避難しなければならぬかもしれない、という不安が頭によぎりました。

4 3. 11後の育児の状況

- (1) 翌朝、遅くならない時間に家に帰ろうと、荷物をまとめて病院をあとにしました。思った以上にひどい町の様子に息を飲みました。すでに給水などがはじまっていて、市役所に向かう知人の姿をみながら家路を急ぎました。

自宅は幸いにも大きな被害はありませんでしたが、壁や基礎に若干のひびが入るなどしていました。2階の部屋に赤ちゃん用のベッドなど準備していましたが、また何があるかわからないからすぐに避難できるようにと、しばらくの間1階のリビングで過ごしました。

ときおり確認するニュースでは、刻々と悪くなっていく福島第一原発の様子が伝えてられていて、不安は大きくなるばかりでした。

- (2) 震災の翌々日くらいに父親から「東海の原発も大変な状況らしい。福島も事故も心配なので親戚の家に避難してはどうか？」と連絡がありました。術後の経過はよかったものの、帝王切開手術をしたため身体は本調子ではありません。こどもを抱いて階段を上ることでやっとの状況でした。そんな状態で、産まれたばかりの長男と上の子二人を連れて、避難などできるわけがないと思いました。

産まれて1週間のこどもを連れて外に出ることで大量に被ばくさせてしまうのではないかと？福島第一原発の状況によっては、ここにいた方が被ばくしてしまうのか？判断材料も少なく、葛藤が続きました。最終的に、父親からの避難の勧めをのむことはできませんでしたが、今もこの判断で良かったのか、無理を押ししても避難した方が良かったのかわかりません。ただひとついえるのはどちらの道を選んでも、こどもを被ばくさせずに、避難することも

その場にいることもできなかった、放射能から逃れることはできなかったということです。

- (3) 震災後数日は電気もガスも止まってしまいました。3月14日に電気が復旧しましたが、水道は19日まで断水していたため、長男を沐浴させることもできませんでした。

3月17日に小学校は再開し、長女は学校へ行くようになりました。二女もしばらくは保育園をお休みしましたが、「家にいてもつまらないから」と三連休あけの3月22日の火曜日から登園するようになりました。

当時はあまりネットで情報をみることがなかったため、あとから知ったことですが、ちょうどこのころ福島から流れてきた放射能が茨城の空を覆っていました。目に見えないとはいえ、子どもたちを通学・登園で被ばくさせてしまったのではないかと後悔しています。

- (4) 原発事故の不穏な情報や余震も多く、落ち着かない日々を過ごしました。そんな中でも長男の母乳育児が軌道に乗ってきた3月下旬ごろのことでした。

「つくばのお母さんの母乳からセシウムが検出された」というニュースが目飛び込んできました。つくばといえば笠間からもそう遠くはなく、つくばのお母さんで検出されるならば、自分の母乳からも間違いなくセシウムが検出されるだろうと思いました。当時は粉ミルクの放射能汚染も日々報道されていました。自分は母乳をこのまま与え続けていいのか？だからといって粉ミルクを与えることなどできない、子どもに何をあたえればいいのか毎日葛藤しました。

前述のとおり、産前からこれは自分の最後の母乳育児だからと周到に用意してきたものでしたが、その想いは千々に壊されてしまいました。その後は食べ物に気を付けるなどして、母乳育児を続けてきたものですが、本来ならば安全で安心であるべきものが、こうして母親にも子供にも不安を与えるものになってしまうとは、今でも悔しくて、悔しくてたまりません。この大切な時間を「返してほしい」と思いますがもう返ってきません。

5 3. 11後の生活状況

- (1) 震災からしばらくして、ご近所の方がタケノコを掘ったからと山のように持ってきてくれたことがありました。義祖母は嬉しそうにしていたのですが、タケノコからも高濃度のセシウムが出ていることは知っていたので、「残念だけど今年は危ないから食べられないよ」と捨てることになりました。おばあちゃんの悲しい顔は忘れられません。

震災の年は梅の実もたくさんなって、義祖母は前の年と同じように梅干を作りました。しかし、放射能汚染が怖くて、どうしても食べるできませんでした。結果的に、この年の梅干は義祖母が最後に漬けた梅になりましたが、捨てることも食べることもできずに今でもこの梅干は残っています。

- (2) 震災の年の夏ごろのことでした。ガイガーカウンターを買って、周囲の線量をはかる方が増えていました。自分も、家の周囲やこどもを連れていく場所に汚染がどれだけあるのか調べたいと購入しました。届いたガイガーカウンターで計測したところ、それほどでもないのではという希望は打ち砕かれ、自分が思っていたよりずっと汚染されていることがわかりました。自宅内で0.08～0.15マイクロシーベルト、家庭菜園の土の上で0.2マイクロシーベルト、比較的線量が高いといわれていた雨樋の下で0.3マイクロシーベルト程度の数値を計測しました。自宅の庭先が目に見えない放射能に高濃度に汚染されていることに大きな恐怖を感じました。

- (3) 同じ頃、こどもを国営ひたち海浜公園に連れていったときにも計測をしました。たくさんのこどもたちが遊んでいるアスレチック広場です。長男をベビーカーに乗せたまま同じ高さ（地上約1m）で、ガイガーカウンターで計測したところ、家の周辺とは違い、みるみるカウンターが上がっていきました。1.0マイクロシーベルトを超えてもカウンターは止まらず、さらに警告音が鳴り響き、凍り付くような気持ちになりました。震災前から何度も遊びに来ていた場所でしたが、ここは危険な場所になってしまったのだと、こどもたちを連れて足早に帰りました。ちなみに、ひたち海浜公園は2014年5月になっ

てようやく高濃度の放射能汚染があることを認め、高線量の区域を立ち入り禁止にして除染をしました。

- (4) 学校でも校庭などの線量をはかってくださるようになりました。それをチェックして、「〇〇には近づかないようにね」と子どもに話すなどしました。

長女が合宿で大洗のこどもの城に行くことがありました。当時海沿いの松林は線量が高いことが言われていました。ボランティアの方が付近を計測した結果があったので、先生にお手紙を書くなどして線量が高い場所をお伝えして対応をお願いしました。このとき、実際に外での活動時間を減らして、特定の場所には近づかないようにするなど対応していただきました。

- (5) 震災以降SNSなどで原発の情報を集めるようになっていきました。原発再稼働に反対する方とのつながりができ、様々な活動に参加するようになりました。2012年7月からは裁判の原告となりました。集会に参加したり、署名をみつめたり、自分たちでイベントを企画したりするなどして東海第二原発の危険性を訴えてきました。街頭などでもお話をしてきましたが、東海第二原発は再稼働しないでほしいという声が多く寄せられます。

6 おわりに

今こうして書き出してみると、普段はあまり考えないようにしているのだ、思い出したくないことなのだとあらためて知らされます。福島原発事故で避難された方や命を失った方からみれば取るに足らないことかもしれませんが、やはり大きな傷になっているように思い出すのは辛い作業です。私と同じように想いを踏みにじられたお母さん、不安や恐怖を感じていたお母さんはたくさんいると思います。またその不安は終わったわけではなく、その後もずっと続いています。

本来であれば、JCO臨界事故で気がつかないといけなかったのだと思います。一度暴走を始めた放射能は人間の力ではとめようがない、原発と人間は共存しえないという教訓が生かされませんでした。

東海第二原発は、40年を超えた老朽原発です。東日本大震災で被災をした原

発です。一度動かしたらなにが起きるかわからない、何かが起きてもただちに安全に止めることはできません。もう二度と原発事故はごめんです。こういう思いもしたくない、だれにもさせたくない、何よりも子どもたちの未来に危険を残したくない、という一心でこの裁判に関わってきました。

東海第二原発は、いまなら止めることができます。

裁判官のみなさまが良心にもとづいて、よりよい未来のために判決をしてくださることを心より願っております。

以 上